シルヴィア・フェデリーチ著『キャリバンと魔女』（以文社）を読む

闘争は継続しているのだ

本書は女性のみならず／というよりも、まず男にこそひろく読まれてしかるべきだろう

入江公康

シルヴィア・フェデリーチ著
小田原琳・後藤あゆみ訳
▶**キャリバンと魔女**
資本主義に抗する女性の身体
1・30刊 四六判520頁 本体4600円
以文社

ハーブ栽培、菜園の手入れ、薬の調合、集会（サバト）、動物や家禽たち、避妊とお産・助産、媚薬や恋のまじない、予言、共感（カウンセリング）をもふくめた民間医療など――ミクロコスモスはマクロコスモスと照応し、素朴な汎神論が、アニミズムがひそやかに息づき、民衆のなかに「魔術（ウィッチクラフト）」は、ある必然的なもの、実際的なものとして存在していた。それは外部の者からはわからない、もしくはじしんもすぐにはそれとわからない、生活に内在する、おそらくは不可欠のロジックとして存在したはずだったのだ。そして、女たちは「魔術」とされたものが可能になる草の根（グラスルーツ）の延長で、彼女たちの紐帯と自律性とを保持しえていたのである。ここから問われねばならないのは、われわれは魔女・魔術について、いったい、なにを知ろうとしていたというのか、ということだ。

それにしてもフェデリーチのこの本は、現在も目のあたりにしうる光景を説明するのに、どれほどの理論的バックボーンをあたえてくれるだろう。現在、マルクス主義を敷衍して最良の水準に達した成果といえるし、またフェミニズムがもったセオリーの精華のひとつでもあるともいいうる、そういう最重要の本なのだ。みてもらえればわかるが、本書は女性のみならず／というよりも、まず男にこそひろく読まれてしかるべきだろう。それは女嫌い（ミソジニー）がいかにして組織化されたか、そしていかに活用されたか――を、確度をもって説得的に、一貫したロジックとして説明するからにほかならない。

フェデリーチがその概念を縦横無尽に使用して解きあかすそれは「原蓄」である。直接的生産手段からの強制分離――「いわゆる本源的蓄積」。われわれはこの概念を『資本論』からさほど展開させることなく、マルクスがいうようにしか受けとってこなかったきらいがあろう。「……ただ、資本主義的蓄積に先行する「本源的」蓄積、すなわち資本主義的生産様式の結果ではなくその出発点である蓄積」――「資本主義は誕生のその当初より、毛穴という毛穴から血をしたたらせて生まれてきた」――それによって資本主義が開始されるさいしょの一撃としての。農民は土地と切り離され、労働力を売却する自由を獲得し、「二重の自由」を享受するプロレタリアートとなった、というあれだ。

しかし、ここで脱落しているのは、再生産をになわされたのは、つまるところ、だれ――マルクスもフーコーもみなかった――であったのかということだ。むろんまず「女」である。村落共同体と封建領主との闘争、すなわち反封建闘争において、過去、彼女たちはじぶんたちの事柄にかんし自己決定をあるていど手中にしえていた。だが貨幣経済（あるいは地代・賦役の金納化）の浸透、土地強奪（すなわち囲い込み）の進行により、共同体は寸断・解体へとむかう。結果として彼女たちのおおくが土地から締めだされたし、生きるすべとしての生存基盤（サブシステンス）を喪失し、零落を余儀なくされた。そして、そのままそれは、それまで入会地（コモンズ）管理の主要な担い手として享受しえた地位の剝奪でもあった。なお、付言しておけば、それいぜんの過程においてキリスト教異端の系譜――自由心霊派、ドルチーノ派、ワルド派、ボゴミール派、カタリ派など男女の平等が比較的担保された「共産主義」的異端諸セクトがこのかん掃滅されていったこともフェデリーチは見逃してはいない。

つづく16世紀半ばから17世紀初頭、教権を凌ぎはじめた国家――ブルジョアと貴族の同盟――がしだいに体をなし、重商主義（マーカンティリズム）がその公認イデオロギーとして猛威をふるいはじめたそのころ、女性への徹底的な調教と規律化が開始される。自律性をうばい、性的逸脱を取り締まり、知的能力を破壊（無能化・幼児化）し、セクシュアリティにかんする決定権をとりあげる。彼女たちの存在を生殖／再生産へと封じこめ、女を「女」へと締めあげて成型する暴力が集中的に体制化されたのだ。継続的な労働力調達の、ということは、蓄積が可能になる基盤の冷酷かつ無慈悲な構築であり、拷問、火刑などその暴力行使のすさまじい有り様――酸鼻きわまる残虐行為のオンパレードと加虐（サディズム）の組織化といっていいだろう――がこの「魔女狩り」だった。

さきに16世紀インノケンティウスⅧ世勅書、『魔女への鉄槌』があり、女夢魔（サキュバス）・男夢魔（インキュバス）をはじめとし、悪魔学のイデオロギーが動員され（有名なところでジャン・ボダンの『悪魔狂』、ボダンが国家主権の理論家であったことに注意しよう）、魔女についての書物も数多著された。フェデリーチはこうした魔女狩りイデオロギーと女性の「みだら」、「淫蕩」、「不逞」、「不貞」、「性的放縦」などの禁圧を丹念にむすびつけ、資本主義における再生産の問題として、きっちり整合的にひも解いてゆく。女性のセクシュアリティ／非生殖行為が悪魔化され、堕胎・中絶の禁止、それに並行して売春・姦通も禁止され、いっぽうで、ぎゃくにレイプが合法化されたし、また禁止しつつじつは売春を制度化し、貧窮につき落としておいて娼婦に身をやつせばいっそうミソジニーが昂じるという循環がつくられたのだ。

マルクスのいう人口法則は、まだまだ経済外的な「自然」に基礎をおくものだったが、それではナイーブにすぎようというものだろう。人口法則をオペレートしようとせんがための前提が「魔女狩り」なのだ。このように女の身体を家父長制のもとに容赦なくねじ伏せ、折檻し、虐待し、屈服させ、服従を強いること、焼き鏝をあて、鉄の枷をはめること、等々。彼女らのセクシュアリティの集中的な破壊、再生産労働の徹底した価値切り下げ。これは現在ある「家庭」「主婦」というものを淵源までさかのぼるならば、じつは拷問具のならべられた拷問部屋にいきつかざるをえない、ということでもある。家父長制家族、生殖／再生産領域への女性の監禁拘束――フェデリーチに先行して主題的につらなる仕事をしたフェミニスト、ミース／ヴェールホフにいわせるなら、「女性はその子宮から、直接的に分離されるかわりに社会的に分離され」、「もはやみずからの身体についての知も影響力ももたない「出産機械」に転化」した、ということである。

しかも他方、デカルト・ホッブズらの機械論が、勃興する資本主義的労働過程の整備と手をたずさえる。超自然的な原因や天の軌道上にある運命という考え方を、自己責任・自己統治の欠如という考え方が駆逐する。身体の規律化にきわめて都合のいいイデオロギーをそれは供給し、魔術という「労働過程の合理化にとっての障害でもあり、個人の責任という原則の確立を脅かすもの」、あるいは「労働の拒否や不服従の一形態であり、権力に対する草の根の抵抗手段」であったはずのものは、それにたいする憎悪、敵意へと変えられていった。

さて、タイトルにある魔女にたいし、もういっぽうのキャリバンを忘れてはならない。「あいつは悪魔なのだ、いくらしつけても」――むろん知ってのとおり、シェイクスピア『テンペスト』に登場する島の先住民たるプロスペローの奴隷である。フェデリーチは、アメリカ大陸の植民地化は魔女狩りと密接にからんで並行関係にあり、基本的に同型の暴力だったことをくりかえし強調する。

「人食い、悪魔崇拝者、男色者というアメリカ先住民の定義は、征服は臆面もない金銀の探索ではなく改宗のための布教活動であるというフィクション」であり、背後にはひたすら国内金量・貴金属量を増大させるべく、殺戮と略奪をほしいままにする強欲な重商主義国家があった。土地の富を強奪するとどうじに、魔女狩り同様――というより、魔女狩りと先住民文化の破壊は相互に交錯しているといったほうがいい――労働力の価値を徹底して切り下げるべく、先住民もまた右記のごときスティグマを与えられたのだ。『テンペスト』を読めば、魔女の息子であったキャリバンが、監禁され、縛られ、鎖につながれ、鞭打たれ、絞首されることの恐怖をたびたび口にするが、むろんそれはそのまま植民地支配の過酷な実態である。

戯曲において、キャリバンは弑殺者たることに失敗する。「キャリバンは自分の主人から教わった言葉で罵ることでしかその主人と戦うことができず、よってその反抗は「主人の道具」に依存していたからである。また彼はだまされて、自分の解放は、強姦と、彼が神と崇拝していた、新世界に移住してきたご都合主義の白人プロレタリアートの主導を通してやってくると信じ込んでいた」。あらたに臣従することで自由を獲得した――解釈をめぐっておおくの議論がある――とよろこびいさんでは、ステファノーとトリンキュローと飲んだくれ、主人プロスペローへの報復をくわだてたが、白人男性プロレタリアは同盟相手としてはてんであてにならないととをあかしてしまう。むしろ連帯が生じたのは――フェデリーチが紹介するように――プロレタリア女性と先住民のあいだにおいてだったのだ。

フェデリーチのこの本がこうして形をなすにいたるまでに、彼女が依拠しえた、先行する成果はとうぜんながら存在していた。ローザ・ルクセンブルク、マリア＝ローザ・ダラコスタ、M.ミース／C.ヴェールホフ／V.トムゼンらのエコフェミニズムがそれだ。ローザが「最後の植民地」＝女性という視角をいちはやく提示したなら、ダラコスタは「家事労働に賃金を」から再生産領域をより明晰に浮上させ、ミースらはグローバル化や国際分業から第三世界を照射し、そこに孕まれる再生産、女性という性への執拗な攻撃を主題化しえたのだった。マルクスやフーコーも――批判的に――参照されるが、その仕事の射程を延ばしえたからこそ、この地点に到達しえたとここではいっておこう。階級性を手ばなすことなく、女性史／植民地史を語るさいの数多くの傍証はいちいち彼女の立論を強化してやまない。

「原蓄」を過去のこととしておしながすべきではない。ミースらがそういったように、それは「継続的本源的蓄積」であって、一時の事態ではけしてない。恒常的な規律化、加虐の連続、たえざる調教と躾の慣習化であり、それを侵犯する者は制裁をくわえられ迫害にさらされる。この体制はいまもって現存しており、フェデリーチが、本書をグローバリゼーション、すなわち構造調整やIMFの施策から語りはじめるように、そういう執拗な「原蓄」が体制として日常化しているということなのだ。全面的な植民地化の進行であり、それはまた女性身体の「植民地化」をたずさえてきた。さらにくわえて、現在では、代理出産・卵子提供など、テクノロジーは、貧困国女性、プロレタリア女性をターゲットにし、「生殖」そのものとしてあつかおうとさえしているのだ。彼女らの身体にかかわる究極的な「規制緩和」であり、「民営化」だというべきだろう。

つぎの引用は、インドの女性ゲリラに同行したアルンダティ・ロイのルポルタージュ『ゲリラと森を行く』（粟飯原文子訳・以文社）から――「これほどの金が動いていると、利害関係を見極めるのが必ずしも容易ではない。自家用ジェットで移動するCEOたちと、ひと月何千ルピーかのために、同胞と闘い、強姦し、殺し、村ごと焼き尽くし、採掘が始められるよう障害を取り除く、「人民」民兵組織内の憐れな先住民特別警察官のあいだには一次、二次、三次と何重もの利害関係者がうごめく世界が存在する」。闘争は継続しているのだ。ここに登場する国家の掃討戦に抵抗する女性ゲリラたちは、「魔女」とされてしまった者たちではないのか、という想像をよぎらせることにこそ、本書の重大な意義がある。

さいご、この意義ある訳業を終えた訳者たちをたたえたい。

（社会思想、労働運動史）